
† the Last desire

人見

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

the Last desire

【NZード】

N3606F

【作者名】

人見

【あらすじ】

断琴とも言える人からの、是が否でも伝えたかった言葉。死んでなお伝えたいと願った言葉。そんな願いを叶えるチャンスを引き寄せた少年がいました。

0：緒論 新月の光の下で

死のうと思つていた。

今年の正月、よそから着物一反もらつた。

お年玉としてである。着物の布地は麻であった。

鼠色の細かい縞目が織り込まれていた。これは夏に着る着物であろう。

う。

夏まで生きていようと思つた。（太宰治）

ある新月の晩、草木も眠る丑三つ時。

それでも眼下の街は眠らない。

煌々と明かりを灯し、全力を以つて夜に挑み、押し返す。

月明かりもなく、星の輝きすらもない。

本来なら暗闇が街を覆つている筈が、不夜城と化した街に、闇は似合わない。

病んでるな……と男は呟いた。街の光りも届かないそこ、日本一高いテレビ塔のてっぺんに、彼はいた。

何だか色の薄いサングラスをかけている。

散髪されたことはあつても、櫛を使つたことがない様な髪。うつかり洗濯機で洗つてしまつたかの様な型の崩れたスーツ。折り目が消えた長いスラックス 余つた分は蛇腹状にたくれていて。そして古ぼけた革靴。その全てが黒で統一されていた。

スーツの中に見えるシャツも、ネクタイも、何故か左手について

いる手袋も黒だ。

そんな、今にも闇に溶けそうな彼の、最後の防波堤の様に白いものがあった。

彼の右手にはめられた、天使のパペット。口がやたらと大きいことを除けば何の変哲もないものだ。全体の割りに大きな丸い顔の下にひらひらの服がついていて、背中に羽が生えている。そして、それこそが天使の印と言わんばかりに頭には輪っかが浮かぶ。

「何がですか？」

幼い声が先程の男の眩きに答えた。

「……。」

男は答えない。

眼下の街を見下ろし、ぽつんと言つた。

「不慮の事故つてのは嫌だな。」

「え、今更……ですか？今までに何件も見てきたでしょうに。」

幼い声が反つてくる。丁寧な口調だがそこに男に気遣う響きは全くない。ただ思つたことを当たり前に口にしたかの様な声が男の傍らから聞こえた。

「ああ……今更、だな。」

男が眩く。

「ところで、“ふりょ”って何ですか？」

幼い声が男に問うた。

「……此処は寒いな……。」

男は無視して眩く。

「そうですね。」

幼い声が笑つた。

1：邂逅 そして彼等に出会った。

夢を見た。一日で悪夢とわかるようなどろどろしたものじゃない。
でもそれは確かに悪夢だった。

俺はその中で意味の解らないものを沢山みた。

びりびりに裂かれた生徒手帳

白い花

涙で歪んだ女の顔

ひっくり返った机

蒼白く光るモニター

膝を抱えて泣く男の子

仁王立ちで見下ろす女の子

白い仮面

嘲りの表情で辺りを囲む

ひびの入った写真立て

ひびの入らない殻

外から叩くは……

そして響き渡る女声

「自* * * * * て* * * * * なさ* * * * * た* * * * * が* * *

* * ジやない！」

え……何……？

俺が気付いたら目の前に見知らぬ天井が見えた。

くぐもった騒音が絶え間無く響く。時折振動が駆け抜けた。

あれ、何か、この天井低くないか？大人は立てないよな。これじ
や。と、漠然と思った。

『気が付いた様だぞ。』

『……裕紀……ゆう、き』

『急いで＊＊＊』

『＊＊＊が＊＊＊』

幾つもの知らない声とよく知っている女の声。

おい……そんなに泣くなよ。正直泣かれたくないんだ。
声を出そうとしても声は出なかつた。ひゅーひゅーと空氣の漏れ

る音ばかり。

おかしい。俺は別に体に異常があるわけじゃないのに。
体の痛みも今は何処か遠いものになつていて。言つなれば、フィ
ルタ越しみたいな感じ。フィルタといえば映像もそうだ。曇りガラ
スから部屋の中を見る様な歪んだ景色。

ものとのものの境界、輪郭、か？それがぶれる。曖昧だ。

『＊＊＊、＊＊＊。』

……耳もか。くそ、嫌な世界だ。どうしたら治るんだろうか。寝
たらなおるかな。

……うん。寝よう。

『裕紀……生きてるのよね？ねえ、裕紀……』

おやすみ。起きたときに健康だといいな。

「あれえ、セツカク気付いたのに、また寝ちゃうんですか？」

幼い声。フィルタ越しじゃない明瞭な声。……誰？

「目を開けて下さいよ。わたしが見えるでしょう？」

言われるままに目を開けると、俺の頭上に何かがある。
人形？

その人形は、よかつたですよう、気付いて。とか言つている。

丸い顔にひらひらの服、頭に輪つかがついている。

天使だ。天使の人形。下から手を入れる、操り人形。

「ホント、このまま死なないでよかったです。」

さつきからよかつたよかつたと繰り返す天使は、動きこそ手を擦り合わせてみたり、顔を振つてみたりと嬉しそうだけど、表情はそうじゃない。

そのガラスの瞳は俺を映すだけで、なんの輝きもないし、口はぱくぱくと動くばかり。人形だから当たり前なんだけど、嫌だ。嫌な感じがする。

多分その嫌悪感が露骨に剥き出しになつたのかもしれない。天使は淋しそうな仕種をして引き下がつた。

「すまん。こいつが変なことしたか？」

横からの声の後、顔が覗く。瞳の見える薄いサングラスをかけた、ぼさぼさ頭の男の顔。

「いや……と、言つよりあんたは何だ？」

「何だ、はご挨拶だが仕方ないよな。」

こんなナリだしな。と呴いて男は紫煙を吐き出した。

左手で。右手にはわつきの天使がはまつていた。

おい、こには……と言いかけた俺を男が手で遮る。

「お前さんの言いたいことは解つてる。」

それでも男は紫煙を燻らす。わかつてんなら止めろよ。

「でも俺は他の人には見えないからな。だから大丈夫。」「は？」

「ちなみに、今お前さんは他から見ると氣を失つてる。」「話しが見える。

「キミ、ゆっくり呼吸を整えて下さい。」

幼い声が割り込む。

男がだらんと下げる右手からその声がする。天使が声に合わせてひょこひょこ動いていた。見事な腹話術だな。とほんやり思いながら、見ていると、

「……ハイ深呼吸う。2回短く吸つてえ、1回長く吐くう。」「吸つてつ吸つて、吐いてえ、と天使は宣つた。

「ハイ、ひつひつ……」

「ちよつと、その呼吸法だと生まれるよ？！生まれちゃうよ？それ
！確かに此処、救急車だけぞ！」

……？、きゅうきゅうしゃ？つて救急車？！

え？何で？俺、どうした？

「どうしました？」

天使が首を傾げる。

つまらなそうにしていた男の顔が真剣だ。

やばい。頭が混乱する。痛い。痛い。体より、頭。

思い出せ、俺に何があった？動け海馬、光れシナバス。

頭痛！止めよ頭痛！

と、そこに男が手をかざした。

「ま、無理矢理思い出してもいい」とはない。

ゆっくりやろう。と男が言つ。

まあいいか。此処が救急車なのは確かだし、だつたら俺は事故に
でもあつたんだろう。おこおい判つていくぞ、と言つ男の言葉を信
用しよう。

救急車が病院に到着した様だ。振動が徐々に収まり、がっくんと
完全に停止する。幾つもの手が俺に伸びて、運び出す。

・・・・・？ちよつと、俺は？おい、置いて行くなよ！

あれ？とか俺の体は俺を置き去りにして運び出されてしまった。
体中に何本もついているチューブとその先の袋が妙に目に付いた。
「行つちまつたな。」

男がぽつんと言つた。

「な、ど、どういうことだ・・・・・・

のどの奥から搾り出すよつこにして声を出す俺。

「なあ、なんていつたら言いのか・・・・・・」

歯切れの悪い男。

「おい、俺だけ体から抜け出して、これつてまるで……」

「そう、キミは一度死んじゃったんですよ。」

あっけらかんと言つてのけたのは天使だ。こりゃじつと男が天使を嗜めているけれど、俺にはそんなことどうでもよかつた。

俺は、死んだのか？ そんなことならもつと亜里沙に善くしてやればよかつた……。

もつと親孝行してやればよかつた……。

もつと田一杯遊びまくればよかつた……。

折角17年間も生きてきたのに、ここで終いか……？

人生悔いが残らないように生きるって言うけど、そんなの無理だよな……。

当時はよかれと思つた選択も、後から見たら酷いもんだよな……。

てか何でこんな安っぽい後悔しかしてないんだ？！俺は？

一人で葛藤してると、男がしぶしぶといった感じに説明しだした。
「まあ、正確に言つと死んではいなんだ。言つなれば仮死状態？ 危篤なんだよ。お前さんは。」

一気に言つてから紫煙を吐き出す。

「俺はお前さんの黄泉路の案内人つてことだ。」

そうでもしないと迷う奴が多いからな、昨今は。と唸る男。

「つて事は死んでないんだな？」

仮死とか危篤とかはどうだつてい。重要なのはいま生きているかだ。

“為せば成る”生きりやいいこともある。

「まあな。でも生きちゃいない。お前さん次第だな。」

それつて俺の心次第で未だ生きれるつてことか？

「それは、どうやって？ 俺はどうしたら生きられる？」

意気込んで捲くし立てる俺を、男は五月蠅そうに眺めた。

「ハイハイハイ、ちょっと待つて下さいねえ。」

幼い声がして、同時に俺の顔に天使が覆い被さつて来た。

「そいつの言う通りだ。ちょっと待て。」

勘違いするなよ、とその目が告げる。

俺をしつかり見据えて、でも何の感慨もない瞳で。

人を射抜く空虚の瞳、例えて言うなら、それは銃口の様だった。

薄暗い、無機質な、光りの差さない瞳。

「お前さんは、『死んでいるのか』と問うのか？それなら答は否。死んでいない。『生きているのか』と問うのでも答は否。生きてもない。」

医学的に言ひなら仮死とか、お前さんの様に危篤とかかな。と男は付け足す。

「あなたに生きる意思があつて、それを提示出来るのならば、『生きる』かもしれません。逆もまた然り、ですけどね。」

横から天使がにこやかな口調で俺の先程の胸の内の問いに答える。

しかし、そこまで聞いて急速に疑心の闇が広がる。

男と天使が天上から來たっていうなら、俺の死亡は決定的なのだろうか。という疑問が。

天上って言うのはつまり全知全能の神サマがおわします処で、そこから男が來たなら、それは俺の死が決まっていたからに外ならない。

だつたら如何に抗おうとそれは無駄だ。

そこまで考えた結果、俺の口から飛び出したのはこんな問い合わせだった。

「それは……運命な、のか？」

どんな答を期待していたのだろう？
是と^{イエス}言つて欲しかったのか？

幾年も前からの決まり事なら、諦めると？

今までだつてそうだつた。

子供のときから、何もかも運命の所為にしてきたんだ。

だつたら今回もそれでいいじゃないか。

でも、その都合のいい言い訳は、今回ばかりは俺の味方じやなかつた。

「そうじやない。」

え、と思わず顔が上がる。

見ると男は両手で何か手帳を覗き込んでいる。

ちなみに右手は天使だ。

口で器用に手帳の一端を掴んで一（咥えて？）いる。

「昨日、新たにお前さんの名前と死因、時間がとかが浮かんできただ。」

もとから書いてあつた名前を押しのけたな。と男は言つ。

・・・・・それってどういうこと？

思ひが顔出でいたのだろう。天使がもごもごと説明する。

けど、聞き取れない。見事な腹話術だなあ。

「つまりは、予想されていた未来じゃないってこいつた。」

つてことは、

「運命じゃないってことか？」

思わず口を衝いて飛び出した言葉に男がじりりと俺を睨んだ。

「まあ、そういう言葉も存在するな。」

吐いて捨てるような言い方。

カチンとくる暇もなく、天使が喋り出した。

「未来つて言つのは、色々な事柄が絡み合つて出来るんですよう。だから、何が起こるかは正確な意味では全然判らないんですね。」

だからあ・・・・・と続ける天使と男の声が被つた。

「詳しい説明はまた後で、だ。取り敢えず移動しよう。」

声を被せる　同時に二つの声を出すなんて、そんな腹話術があるんだろうか。

声質も全然違うしなあ。

この期に及んでそんな事を考えた俺はおかしいのだろうか。でも解らないことはしかたがない。いまは一先ず俺の置かれた不自然の説明を受けよう。

取り敢えず男の提案通り、俺たちは救急車から出た。

2：晩霞 赤色が沈んで行く。

男につられて行き着いた先はとある廃ビルの屋上だつた。

「今更と言われちゃそれまでなんだが、取り敢えず自己紹介だな。」

と男。

それには俺も大賛成だ。なんだか得体の知れない彼らだ。是非と

も素性を明かして欲しい。

「俺の名前は黒神水月。」

そんでこっちが……と続ける男の先を天使が継ぐ。

「わたしはづき君の妻の……あうっ！」

天使が妻と言うのがはやいが黒神はしゃがみ込みながら右手をコンクリートの床に叩きつけた。

「どの口が妻とか吐かしたんだ？」

徹底的な無表情。なまじ怒られるよりも怖い。とくにあの銃口の瞳では。

「イヤだなあ、ちょっとした冗談ですよ。イットワズジョウク、オーケーですか？」

ぴょこぴょこと黒神の顔に近付く天使だが、

「あううつ！」

再度コンクリートだ。

見ていて胸が痛まない訳でもないけど、可笑しくて笑ってしまうた。

「あらあ？わたし達の夫婦漫才がうけてますよ？」

「夫じゃない。」

「出た！お約束ですっ！」

「ネタじゃねえから……」

駄目だ……」の一人、呼吸がぴったりだ。こうえきれずに笑つてしまふ。

「えっとお・・・・・・わたしが・・・・・・」

言い出した天使はそこで黒神に睨まれ、一瞬口ひもる。

「相棒のつありえるです。つあらつて呼んで下さい。」

「えつと、黒神さんに、つあらちやん？俺は裕紀、三原裕紀みはらゆきです。」

「「ちん（ちゃん）はいい（です）よ。」」

二人の声がハモった。

「それで、アンタたちは一体何者なんだ？」

俺は黒神を見つめた。銃口の瞳が俺を見返す。

「先ず、訊きたいことは？」

そう訊かれて俺はまごついた。

知りたいこと、気になることは沢山あるけど、いざそういう訊かれる
と答えに詰まる。

「そうだな・・・・・・アンタ達の素性？そして俺の状態？そして
俺は今後どうしたらしいのか？」

そこまで言って案外少ない事に気づく。人間案外とつさのことには頭が回らないのかも知れないなど一人で感心した。

「ふむ。」

黒神は唸つて腕を組む。煙草を口に咥えたまま。紫煙がゆらゆらと
立ち昇つているのが見えた気がした。

「順に答えていくとな、俺は“案内人”、または“導く者”だ。」

ふつと紫煙を吐き出す。

右手の天使、つあらは大人しくしている様で、実はこちやこちや
動いていた。

あれは全く何なんだ？本当にただの人形なのか？

「死んだ人間、ここではお前さんを天上につれて行く役目だ。」

現世にそのままのさばつて悪靈になつたりするのを防ぐためだと黒
神は言った。

「こいつは見たまま、天使だ。」

え、そこには“人形”が当て嵌まるのでは？と思つたが流石に言えなかつた。

「天使サリエルって聞いたことないか？」

「ないね。」

即答だ。

「ないならいいよ。そいつの生まれ変わりだと思ってくれて構わない。」

生まれ変わりねえ・・・・・・

当のつあらは俺の視線に気付いたのか、小首を傾げて笑うような仕種をした。勿論表情は変わらない。仕種だけだ。

黒神は、と言うと空を仰いで紫煙を吐き出していた。俺が黙り込んだので間だと思ったのだろう。

「『ごめん、続けてくれないか。』

俺が軽く詫びてみると、黒神は謝ることじやないと何とか言いながら話し出した。

「そして、お前さんの状態は……かなり危険な状態だ。」

深刻な表情。だけど……

「今、この俺の状態は？」

ああ、と黒神が頷いた。

「今は靈体。だから人には見えない。俺もな。だから此処にいても大丈夫。」

大丈夫って言われてもね……

「最後に、今お前さんがすべきことは、俺と天上に行くこと。」

死ねつてこと、か。

「やっぱり俺つて死ぬべき存在なのか？」

そうなのか？その手帳に名が載つたからには、死ななきやならないのか？

黒神は答えない。

だまつて俺を見ている。

銃口の瞳、光の差さない薄暗い瞳を通して。

「……俺が死ぬ期日はいつになつてる?」

そうだ。死んでしまうならせめて挨拶してから死のう。
残された時間で悔いのないようにしたい。

そんな単純な願いを願つた俺は、まあなんと樂觀したものだらう。
自分を外から見る、もう一つの自分が言つ。

でも確かに俺はそう思った。悔いのない様に死にたい、つまりは、
死んでも構わないと言つことだ。何処かでそう感じた自分を、客觀
的な自分は嘲笑う。

『生きなくていいのか?』と。

いや、生きたい。

でも、自分は別にこの世が好きではなかつた。運命を捩曲げてま
で生きなくてもいい。

あれ?でもこれは運命じゃなかつたんだっけ?あれ?じゃあ俺は
死に抗うべきなのか?抗つてもいいのか?でも死は運命。誰も止め
られない。人生が川だとしたら、死はさしづめ海だ。回避出来ない、
川の終着。

終着に着くその日付はつあらが告げる

「明日の朝です。」

……明日?明日になつたら俺は、名実共に死人になるのか?
いくらなんでもそれはないだろ……。抗おうにも短い。

冷静な自分が俺を更に嘲笑う。

でも致し方ない。死を受け入れようとしたのも、死に恐怖したの
も俺だ。

俺と、冷静な自分が色々と言い合い、行動に統制が取れなくなる。
俺は無意識のうちに“ドッキリです”と書かれた看板とか、カメ
ラとかを探していた。以前見たことがある。

“あなたは明日死にます”と告げて、その人の一日を追う企画。
でも、カメラも看板もない。気遣わし気に俺を見つめるつあらと、

空に紫煙を吹き出す黒神が見えるだけ。

風は頬に冷たく、いつの間にか膝を、手をついていたコンクリートが痛い。

あの企画の彼女はどうしてた？

俺はどうして明日を迎えるんだ？

亞里沙……。そこで浮かぶのは亞里沙の笑顔だ。

俺の*****。

「そこで、だ。お前さんはどうしたい？」

黒神が訊いてくる。

どう……どうって？

「俺達が今日お前さんに会いに来たのは、それなりの理由があるんだ。」

理由……？俺に、早めに、死を、伝える、訳……。

「ただ死なせるだけなら明日来ればいい。」

違うか？と言う黒神の声がやけに遠い。

これは、早めに死を告げられた今日は、何の為？黒神の放った言葉が俺の表面を滑つて消える。頭に落ちて来ない。

「これはもうとりあえずよう。」

つからがひょこっと動いて、俺の俯いてる顔を覗き込む。

モラトリアム……執行猶予か。その猶予を貰つても俺はどうしたらいい？挨拶……か？亞里沙に、何か言ってから死にたい。ずっと好きだった、俺の*****。

でも……もう、顔も思い出せない。

名前と、俺は亞里沙が好きだったという事実だけが残っている。好きと言つ感情も思い出せない。

ただ、知識として、文字列の様に好きだったと知つてはいるだけ。

「本来、人は死ぬとき、全てを失う。」

黒神がゆっくり話し出すのを何とは無しに聞いていた。

「地位や名譽、愛する人。体も、記憶さえも。」

全てを置いて逝かなきゃならない。と黒神は唸る様に言った。

「そうしないと疵が付く、痕が残る。拭つても消えない、そうとう工^ひいやつがな。現世の魂^{じんま}に、来世の軀^{うつわ}に悪影響を及ぼすんだ。」

そして輪廻にもな。これは吐き出す様に黒神は言つ。

「待てよ、でも、俺は……」

覚えてる。名前を、自分の名、好きだった者の名を。

そう言おうとする俺を黒神は遮つた。

「そつなんだよ。お前さんは覚えてる。記憶の一部をしつかり握りしめたままで死んだんだ。」

つまり、どういうこと?

「このまま天上に行つたら輪廻の環に入れないんですよ。」

つづつあらだ。緊迫感に欠けるその声は、しかしあんまり嫌じやなかつた。

「お前さんだつて生まれ変わつてから、前世の念を持ち越したくないだろ?だから俺達は正式にお前さんが死ぬ前に、お前さんにその記憶を手放して貰わなければならない。」

だから早く来たんだよ。と黒神は紫煙と共に吐き出した。

「手放すつて言つてもね……。そう簡単に忘れられるもんじやないよ。」

俺は弱々しく反論する。

正直参つていた。

生前の俺に何があつたのか知らないが……。素直に死ねよお前……と言いたくもなる。

「まあそつだらうな。」

黒神が頷く。

「その為には生前のお前さんがやり残したことをするればいいんだよ。」

と、黒神は続けた。

「やり残したこと……。」

黒神がひたと俺を見る。

“見透かすような瞳”を持つ人には会つたことがある。あれは……

……誰だつたろ？でも黒神の瞳はそれとは違つ。人を射抜く空洞の瞳。何の感慨も示さず、何の光も差さない、空虚で無機質な瞳。

こちらを見つめるつあらのガラスの瞳の方が、戸惑いとか気遣いとか、感情を剥き出しにしているように思えてくる。

「考える。お前さんは何をしたい？お前さんが掴んでいる記憶の欠片は何を意味する？」

「記憶の欠片……。」

きいん、と何かが響いた。

“生徒手帳”

“白い花”

フラツシユバツク

“女の顔”

“机”

俺の頭に入り込んで

“光るモニター”

“泣く男の子”

否、もとから在つたのか

“見下ろす女の子”

“白い仮面”

俺の記憶の欠片

“嘲りの表情”

“写真立て”

けれどそれらは、

“ひび”

“叩く……”

意味の解らない、静止画。

そして

「自分な＊＊＊て言＊＊＊めなさ＊＊＊あんた＊＊＊な私が＊＊＊たいじやない！」

響き渡る女声が脳を攪拌する。

「この声は……」。

彼女は……亜里沙は、俺に何を伝えたかった？

思い出せない。それでも……。

「亜里沙に……話を……話を聞かないと。そして……伝えないと……。」

「何の為に

何の、ため……？

それは……。やり残したことしきりと言つから……。

輪廻の環に戻る為か？でも、そんな、別に輪廻なんていいじゃないか。始まりも終わりもない環に、入る必要なんて何処にもない。それとも輪廻に迷惑をかけないよう、か？生前の念は輪廻にも悪影響だと言つていたな。

そうか……俺なんかの為に迷惑をかけることなんてない、か。

いや……。そんなこと関係ない。

「亜里沙が……何かを伝えたがってた……。俺も最期に……ずっと思つてた、ことを、伝えないと……。」

「それは？」

「判らない……。でも何か、凄く大切な、言つべきことがあつた気がするんだ。」

「判らないことをどうやって伝える？お前さん自身も判らないものを、どうやって相手に判つてもう？」

……いや、これはそんなに難しいことじゃない。たつたの一言、それだけを伝えられれば、いい。

「亜里沙に言えば判るさ。」

朧げな亜里沙の顔が笑顔になつた、そんな気がした。それとも、俺の思い込みだろうか？

「会えば判る……。そうかもな。そう思いたい、よな。」

黒神が呟く。

酷く遠い目をして。

まるで何か、愛おしいものが彼方にあるかの様な、淋しい、切ない表情。彼のその銃口の瞳には何が映っているのだろう。全く光りの差すことのないその瞳に映るもの。

彼の瞳に光りを宿した人はいるのだろうか、と出し抜けに考えた。ふと黒神の右手を見ると、つあらが気遣わし気に黒神を見ていた。そんなつあらの顔が朱い。

あ、

「夕焼けだ……。」

思わず声をあげてしまう。

今まさに地平線に陽がその姿を沈めんとするところだった。それは本当に見事な夕焼けで、ビルの屋上から見るそれは、いつも神々しい。真っ朱なその球の放つ光りは、全てを朱く、朱く染め上げている。

“夕焼けってあたしの一一番好きな天気かも。”

声が……

“それは……天気と言わないと思つよ。”

声が聞こえる

“何でよー。空模様を天気とするなら、夕焼けも立派な天気の一部でしょ？”

この声と……

“あ、ああ。そうかもね。で、何で夕焼けが好きなの？”

そしてこの声、

“明日が晴れると思つと嬉しくならない？”

間違いない、

“……それだけ？”

俺と、

“むう。まあ夕焼けそのものももちろん好きだよー。あの赤さ、あのきれいさ！どれを取つても素敵でしょ？！”

亞里沙の声だ。

“ そんなもんかなー。だって、ただ空が朱く染まるだけでしょ？
心ないことを言つ俺。 ”

“ そんな単純なものじゃないよー。もう、一度は外に出てみなよ。
憤慨する亜里沙。 ”

“ 嫌だよ。面倒だ。 ”

素気ない返事をする俺。

“ 部屋から一歩出るだけで凄く世界が広がるのにー。勿体ないよ。
そうだ……。 ”

“ わかつてはいるけどね……。 ”

亜里沙は……。

“ ねえ……あたしはわ……裕紀に……
俺の……。 ”

“ ……明日提出の宿題つてあつた？ ”

*****になつてくれたんだ。

“ え？あ、ああ！なかつたと思うよ。 ”

それでも俺は……*****で……。 ”

「すゞぐれいですねえー。」

つあらの声で我に返つた。

俺達三人は廃ビルの屋上で夕焼けを眺めている。何処かで亜里沙
も見てるのだろうか。

「会いに、行くのか。」

黒神が俺に、念を押すよつと云つた。

「ああ。」

亜里沙の言葉を聞きこ、亜里沙に伝えた。

3：聳懼 こわいこわいこわいこわいよこわいおそれそろしい。

夜の闇を銀色の直方体がヘッドライトで切り裂く。人間で言うおでこの辺りに行き先が印された電車に俺達は乗っていた。

何故か住所より一県も北（らしい）にいた俺達は帰宅ラッシュに逆らつて上り電車に乗っている。

この19：00という時間、そして上りであつても乗っている人は案外多い。さつき下りのホームに殺到する人を見ただけに変な気分だ。

携帯に向かう人、文庫本を読む人、漫然と立ち尽くす人。みなが一樣に目的地に向かつて進む。只方向が同じと言つだけで、こんな狭い空間に赤の他人と一緒にいる。

正直な話し、あんまりいい気分はしない。基本、人肌の生温さみたいなものが嫌なんだ。

……とそんな事を思つてられたのもそこまでだった。

「おい、動くぞ。」

黒神が俺の肩を突く。

目の前にはまさに此処に座ろうと寄つて来る人影が。俺達は人は見えないから、しそつちゅう上に座られそうになるのだ。

黒神曰、人は俺達に触れないから、上に座られはしないけど、お互いいい気分はしないそうで、さつきからこうして何度も移動しているのもその為だった。

空席を見付けてふうと座り込む。

「間もなくハトー。ハトに到着です。1番線に到着、お出口は右側です。」

変に響く間延びした声が次の駅名を知らせた。

程なく電車は駅に滑り込む。1番線と言つても、改札まで行くには何段階段を上るかわらない様な途方もなく大きな駅だ。窓の外を見ると『波斗』と書かれた看板。成る程だな。

ドアが開き、人が乗り込む。意外なことに俺達のいる車両に乗つたのはたつた一人だつた。端の方の車両だからだろうか。路線が寂しい路線なのか。

乗つて来たのは少し

「おっ」と思わせる程の可愛い女の子だつた。
歳は俺と同じくらい。高校の制服の様なものを着ていて、スクールバッグを肩に提げて脇に抱えている。そこらの女子高生が使う様な薄い紺色のやつだ。やや童顔目の顔立ちはきれいに整つているが、きれいよりも可愛いが似合つ。

暑いのか中程までたくし上げられている袖から伸びる腕も、最近の女子高生の例に洩れず短いスカートから伸びる脚も、華奢な見た目に反せずすらつと細い。……大人は眉をひそめるが、最近の若者の風潮に内心ガツツポーズをしたのは大人も同じだと思つ。

女の子はすつと車内を見渡してから俺達の向かいに座ると、少し左腕を気にかける様な仕種をした。

捲くつた袖から伸びる、剥き出しの華奢な腕をさつと摩る。その様子を見ていると、不意に目が合つた。

しかし直ぐにすつと逸らす。

それは日常ではなんの引っ掛かりもない些細なことだけれど、今では何だか引っ掛けた。

彼女は膝の上にバッグを置き、バッグとおなかの間に左腕を入れて、何とは無しに前を向いている。

けれど、しばらく観察してみると、その目の先に気付いた。彼女の視線の先、その焦点が合う処には、人形があつた。

彼女はつあらを見ている。

何で？いや、確かに黒スーツの男が天使の人形を手に着けていたら変だよな。けれど、俺達は見えない筈だ。

俺達は靈で……。そうだ。そうだよ。ただ視線がこっちを向いてるだけだようんだって俺達は見えないのだから全くただ視線が向いてるだけで勘違いするなんて俺は随分自意識過剰になつてるらしいな俺達は見えない彼女は見ていない見ていない見られていない見られていない見られていない見られていない見られていらない見られていない！！！！

と、つあらが彼女の視線に気付いたのか、ぴょこんと彼女に手を振った。

彼女は驚いた様に目を見張り、それから胸の前で小さく手を振り返した。

俺の咽がごくっと鳴るのが判つた。

見えている。

俺が思わず取つた行動は腕組みをして目を閉じている黒神の肩を突くことだった。

「何だ？」

不機嫌そうに黒神が俺を見る。

「め、目の前の女の子、俺達が見えてるみたいなんだ。」

俺が言う。

胃がひっくり返りそうだ。声が震えないようにするのがやつとだ。

「ふーん。そうか。まあ、そんなこともあるさ。」

黒神はしかし、事もなげに言い捨てた。

「靈感の強い人なんて別に珍しくもないだろ？」「

……な、成る程。

「た、確かにそうだよな……。」

だけれど、俺にはそれじゃあ済まない。見えない、それがこんなにも俺に平穀をもたらすのだとは夢にも思わなかつた。

余りのショックにちらつと黒神の横顔を盗み見ると、驚いた事に、黒神は目を見開いて固まっていた。

今まで感情をあらわにすることなどなかつた黒神の、薄暗い、無機質な、銃口の瞳に映るのは、動搖と、恐怖。否、あれは畏怖だ。驚きと敬畏、そして恐怖。

……何で？

その視線の先には彼の女の子。彼女は可愛らしい顔を苦痛に歪めて左腕を摩つている。

そこには摩訶不思議な刻印が浮き上がつていた。

左手の甲の刻印を中心に、左腕の肘までに紋様が浮き出している。それは、皮膚を引っ掻いたときの様に赤く、しかし入れ墨の様にはつきりと。

彼女はそれを苦しそうに摩つていた。

「う、動ぐぞ、動こう。」

そう言つた黒神の声が震えている。その見開かれた目は、蛇に睨まれた蛙の瞳の様な、自分と比べて物凄く大きな存在を目の前にした小動物のそれに似ていた。

彼女の正面を足早に去つてから俺は黒神に訊いた。

「今は……何？」

しかし黒神は寡黙にして答えない。

「世の中には知らない方がいいことがあるのですよう。」
と、つあらが執り成す様に言った。
え？

『しラナイほうガイイコトガアル』？その言葉に俺の頭は真っ白になつた。

何、？か、何かが、出て、あれ？ちょ、つ？、れ？

「お、……お前、は、知つてゐるんだろ……？」

「ふえつ？」

つあらが声を上げる。

幼い女の子の声で。全く不意を突かれた、無防備な、警戒心など微塵もない声。

冷静な自分が声を上げる。

『あー俺、こんなことでキレるような奴だつたんだ。』

『うる、さい……五月蠅いつ、五月蠅いつ！』

俺の中から何か沸き上がって来る。真っ白な怪物。全てを壊したい、壊して終わりにしたい、と願う怪物。

抑えが、効かない。理性は、理性は？！理性はいないのか？！バカンスにでも行つているのか？！戻つて……戻つて来、ない。

「お前は知つてゐる。お前も、お前も。お前達だけが知つてればいいと、言つのだな？」

黒神の瞳は既に銃口の瞳に戻つてゐる。それを細めて、俺を見て。

『俺は本当にこれでいいのか』

冷静な自分の声。

しかし哀しいかな、その声は既に怪物に呑まれた俺には届かない。

「そうやつて……俺を弾いて……お前達は……。」

声が、聞こえる。

『お前は知らなくていいよ』

嘲りの表情

『知らぬが仏ってやつだよ』

俺を見下ろして

『沈黙は金とも言つからな』

せせらり笑う

『あんたに教える意味なんてないわ』

侮蔑の意味で

『じゃあ、あたしが教えてあげようか？』

にこやかに

『えーマジ？それって凄くカワイソウじやん？』

詐りの

『でもお、凄く知りたそつだしい』

親切

『あんたつて…………』

「 」

つあらが何か言うのだけが判つた。

「黙れええええええええええ！」

脳から電気信号が放たれ、神経を駆ける。その指令に筋肉は忠実に従つた。一瞬にして縮み、バネの様に伸びる。

則ち　俺が気付いたときには目の前に剥き出しの黒神の右手があつた。その右手はたつた今までつあらの為に持ち上げていたそのままだつた。

つあらは、俺と黒神の間辺りにくたつと落ちている。下から手を入れる操り人形という特性から、顔にしか綿は入つておらず、服しかない体はぺたんと垂れ下がっている。

「あ…………」

激情の後悔は思つたよりずっと早かつた。せめてもつと遅ければ、と言つても詮なきことだ。

震んだ視界が落ち着きを取り戻す。それと同時に、黒神の射す様な視線を痛い程に感じた。

「あ、お、俺…………あの…………」

視線に耐えられなくなつて顔を背ける。

視線を逃がしたその先につあらが、いた泣いていた。床にはいつくばつて、背を丸めて、顔を歪めて、涙だけは見せまいと必死になつて、泣いていた。

泣いていたんだ。あの時、あの場所で。幾つもの足のすぐ傍で。

一つの足が振られる。

少し遅れて幾つもの足。

無慈悲に無感動に。

往復運動をする振り子の様に。

只々無造作に無意味に。

突き刺さる。

腹に。

背に。

吐き出される唾液や胃酸。

卑下た笑い声。

涙と鼻水で汚れた顔。

涙。涙。涙。涙。涙。
涙。涙。涙。涙。涙。
涙。涙。涙。涙。涙。
涙。涙。涙。涙。涙。

。 。

気が付いたときには黒神がつあらをゆっくり拾い上げていようとだつた。そのつあらの顔に涙はない。当たり前だ。

「あ、あの……」

俺はつあらに謝ろうと手を伸ばした。しかし黒神の右手に収まつたつあらは、ふいと顔を背け黒神の胸に顔を押し付ける。黒神がそうしたのか、それともつあらの意志なのか。

伸ばした手は所在なげにふらついて、最終的には俺の頬を搔いた。痛い。

黙りこくる俺を見てから黒神は言った。

「降りるぞ。」

俺にはそれに従う他なかつた。だつてそうだろ？彼らは俺なんかの為に来てくれたのだから！

住宅街の夜の道を歩く。

やたら整備されたその町並みは何処かよそよそしい。家の敷地と道を区切るブロック塀。等間隔に道を円錐形に照らす水銀灯。ちつちつと全てが直角に交わる道。

その決して太くはない。ましてや歩道なんてない道を普通にすたすたと歩く黒神と、少し遅れてとぼとぼと歩く俺。

心なしか水銀灯も薄暗い。どんなに明るい灯かりの下でも俺の影はもう映らないんだよなと考えたりした。

俺は一体何をしてるんだろう。

何だか知らないうちに死にかけて。差し延べられた手を払った。

謝ることも出来ずに、それでも傍にいてもらつて。

全く、情けない。

視界には舗装されたアスファルトと俺のスニーカーが映る。

俺なんかのために来てくれたんだ。そう思つても駄目だった。

折角来てくれたのにな。恩を仇で返す様な真似してごめん。わざわざ来てくれてありがと。面と向かつて謝れなくてごめん。さよなら。

視界の内の俺の足は自然に、ホント自然に、俺を乗せたまま、脇道に逸れた。
さよなら。さよなら。さよならだ。

ひと時の激情に任せて拳を振るう。

それによつてこわれるものがあると気がつくこともなく。

否。気付いているのだ。

知つているのだ。

激情の訪れとともに眼界が狭まるだけ。

少年とは人間と呼ぶにはまだ早い。
経験も無く、自己の責任も負えない。
それでも、感情は複雑化して、
それでも、彼らはあまりに非力で、
手にする手綱は細過ぎて、
留めることも、
諫めることも、
ましてや、乗りこなすことなど、
出来やしない。だから、彼らは、
振り回され、

翻弄され、

呑み込まれる。

流れに流されて、行き着く先は何か。

……何にせよ、難儀な話しだ。

by kurokami miduki

3・鬱懃 こわいこわいこわいこわいおれやれ（後書き）

んー。こんにちは。今は夜です。遂に“不思議不可視議相談所其式”に“この小説は更新されていません”メッセージが出ちゃいました。確かに筆が明らかに遅いのは自覚していますし、一つのお話をあつちのカット、こつちのカットと書いているので全くもって進まないのです。はい。ですから、間にこんな書いていたんだよ、とこちら、投稿致します。これも途中です。多分同じメッセージが出ることでしょう。でも長い目で見守って頂けると幸です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3606f/>

† the Last desire

2010年10月28日14時08分発行